

### 歴史と労働価値論：価値と生産価格に関連して

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

66

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

109

(終了ページ / End Page)

142

(発行年 / Year)

1998-07-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002582>

# 歴史と労働価値論

——価値と生産価格に関連して——

平 林 千 牧

## 1. はじめに

ことばがきわめて歴史的産物であるということは、おそらく経済学の諸規定の変遷、あるいはその解釈の変化によってよく示されるのかもしれない。もちろん、こうしたことは一般的に十分知られていることであるが、それにしても、経済学の中で、こうしたことに関連した歴史と解釈の点でもっとも典型的なものとして確固たる地位を占めてきたのが労働価値論だとしても、それほど異論はないはずであろう。経済学の歴史の中でそれを最初に体系的に主張した A. Smith 以来、労働価値論は、少々妥当性を欠く表現であるにしろ、経済学上のことばとして幾多の言語的冒険の対象であったし、依然としてそうであり続けているといえそうである。

A. スミスがこうした冒険の行程を見続けていたとしたら、どう感じているかを想像するのみなかなか興味深いことであろう。だが、おそらくある程度間違いないことは、この冒険が彼の想定した範囲つまりは 'visible hand' の範囲内に留まっているということかもしれない。彼の労働価値論の構造からすれば、それは巧妙にできていて、何はともあれ労働＝価値ということばが用いられる以上は、どのような用い方であれ彼のその構造の中に収まると判断できそうである<sup>(1)</sup>。

また、彼の価値論の理論展開からみると、こんどはそこに含まれた問題

が指摘されて来たのであるが、その問題自体がスミスの巧妙な仕掛けのごとき作用を果たしており、この点でも依然としてスミスは健在だとみうるであろう。もちろん、その仕掛けについて云々する必要はないのかもしれない。しかしながら、ごく簡単にその点についてみておくことは必要であろう。

価値論に関するスミスの仕掛けの第1は、いうまでもなく彼のいわゆる二面的価値規定である。投下労働・支配労働といわれているそれである。第2は、第5章と第6章との間に設けられた「裂け目」である。つまり、「ストックの蓄積と土地の占有」とを基準にしたその前後関係によって説かれるべき価値論の構造に関する事柄である。第1の価値規定に関する議論は、D. Ricardo以降いわば価値論論争史の王道ともいべき歩みの原点でありかつそのすべてを貫徹することになっているとさえいえる。よく知られているように、リカードは、スミスの支配労働価値論を批判し、投下労働価値論によって彼の原理を一貫させようとしたのであるが、その結果、かえって、明確に価値・[生産] 価格（自然価格・比較価値）の問題を提起せざるをえなかった。

したがって、その時点つまりリカードの『原理』刊行時たる1817年からすでに180年へた今日において、その衣装は変わっているにしろ依然として同性質の議論が行われていることは、一方でのその問題に対する難解さと他方での問題に対する疑問とを示すことになっている。つまり、労働価値論の理解そのものへの疑問である。スミス以降からしても優に200年を超えて未解決であるということであれば、提起された問題そのものに疑問が提示されるとしてもそれほど不自然なことではないであろう。とはいえ、「市場」が、「個」と「社会」との関係について決着をつける機構だという点について疑問の余地がないとすれば、そしてそこでは「価値」論が必然的だとすれば、スミスの規定は経済学の存続理由とまでいえるほどに確固としたものともいえるのであろう。

第2の「裂け目」についても、問題は依然として健在だといわざるをえ

ないであろう。価値と生産価格の関係について、古くは資本主義の歴史的発展段階の違いが対応するという F. Engels の解説が、スミスの理論を明確に引き継いだかごとき形を示していた。この解説は、ほぼ R. Hilferding によって継承され価値からの価格の乖離が資本主義の歴史的発展に対応するという解説をより一般化したといつてよいであろう<sup>(2)</sup>。しかも、この一般化は、たんに価値・価格という経済学の問題だけではなく、それを越え歴史に対する理論の関係という社会科学の本質の議論にまでふれる要素をもたらした。

経済学の範囲だけに限っても、その「裂け目」はやがて価値・生産価格・独占価格によって表される歴史的発展の解明へと引き継がれることになった。これも歴史と理論との関係に対する一つの見地を示すことになったものであるが、労働価値論に根差す価値とその市場的实现（価格）の問題としては、実現機構の欠陥とその累積過程として資本主義の「崩壊」論あるいはその意味での「危機」論に結びつく議論とも無関係ではなかったといえよう。したがって、こうした理論と歴史という道具立てからは、スミスをその要素とする「市民社会」論をも含む思想的表現・理念的議論を伴い広く社会科学の本質におよぶ議論にまで至るのは必然的だった。

もちろん、これもスミス価値論に起原をもつ事柄であると指摘できる。経済学に関する議論の出自を問えば、それらはすべてスミスに発することになるということは、結局あまり意味のあることではなく、ごく平凡な指摘であるとしても、やはり敢えてその平凡さに立ち返ることも必要になる場合もあろう。とりわけ、経済学にとって価値論が依然として不可欠な装置であればそうである。スミスがそうであったように、この場合、価値論はたんに市場の交換基準の説明原理とされただけではなく、「社会」の説明原理として着想されたものでもあった。おそらく、スミス以降、彼の主張によって重視されることになった労働価値論にとってはこの点こそが重要であったといえよう。そして、今日依然として価値論が議論の対象たりうるのもこの意味においてであろう。

もっとも、スミスから200年以上経過しても価値論についての議論の本質はあまり変わらないのではないかという点は、ことが「原理」的規定に関わる以上当たり前だという指摘で事足りそうである。しかしながら、その原理が歴史に対してどのように定位されているのかは、それほど定かではないように思われる。この点は、例えば、「原理」の意味に不可欠な「純粋化」傾向に関する議論を取り上げてみれば直ちに明らかとなる。

すなわち、一方では、それほど異論なく認められるはずのことは、スミスによって「原理」に関わる議論が体系的な色合いを持って主張されうるようになったのは、対象の示す傾向＝純粋化傾向がいつそう明白になってきていたからであった、ということである。しかし同時に、それはスミスの時代に始めて現れた現象ではなく、彼に先立つ重商主義期でも現れていた傾向であった、ということも認められていることである。ところが、例えば T. Mun を代表させるとして、その重商主義の時期とスミスの時期とではすでに1世紀を超えるほどの期間があり、理論と現実との関係から見れば、スミスにとっては彼に先立つマンのような議論はおよそ理論として繋がりをもちうる水準のものとは認識されることのない対象であった。

しかも、スミスにとってそれはきわめて明確に批判の対象であった。保護主義の体系であり、いわば市場経済的活動を制限し、結果として社会の発展を阻害するものであった。つまり、彼の目からすれば、純粋化傾向は、より自由な活動による市場経済の拡大であり、その結果生ずる富の増進であった。しかしながら、先行者とのこうした関係は、じつは良く知られているように、T. マンにも該当する。つまり、マンの balance of trade system は先行者である balance of bargain system への批判つまり個別的な取り引き差額を重視する Gerard de Malynes らに対する批判から提起されたものであり、まさに国内市場の拡大をもたらす主張であった、といて差し支えない。

こうした拡大傾向を対象とし、ここに「純粋化傾向」の意味を積極的に見出そうとする考え方が強められている<sup>(3)</sup>。最近では、誰の目にも明らか

なように、いわゆる市場経済が人間社会の経済活動をほぼ普遍的に律するかのような傾向を強めているということから、両傾向の区別が解消されていると主張していると思われる。つまり純粋化傾向は限りなく市場経済の拡大傾向だということである<sup>(4)</sup>。

しかしながら、依然としてもっとも有力かつ重要な見地は、純粋化傾向が自律的かつ自立的傾向であるということによってこそ労働価値論に基づく「原理」が可能であったし、なおかつ「原理」と歴史との関係に十分な意味を与えうるといふ主張である。とりわけ、商品経済がそれ自身の活動で「社会」を律するという傾向なくして「原理」を明らかにしえない、という主張はもっとも基本的な見解であろう<sup>(4)</sup>。「原理」は本来的に商品経済がそれ自身の力で社会を律するという点を度外視しては成り立たないという一点は、資本主義の歴史的發展をその原理との関係でどう説こうとも、それぞれに基本的認識として共通している。

ところが、こうした自律的傾向によってこそ労働価値論に基づく「原理」が可能だとすることは、その当否はともかく、結局この経済学に極めて厳しい困難をもたらしたことになる。つまり、その自律的拡大傾向は、ほぼ19世紀までの資本主義が示した傾向であり、その限りで原理を可能にしたのである。したがって、現状において、上述のような価値・生産価格の問題が依然として未解決だとすれば、それは、すでに自立性を失った現代資本主義を対象に解決しうる問題ではないのであるから、経済学的に有意義な議論に足るゆえんをどう定めるか、という課題に直面する。

すなわち、スミスが提起した問題は、大筋として自律的純粋化傾向を歴史が示していた期間にもっとも有力な経済学上の議論として扱われ、かつ経済学の発展に貢献することになっていた。常識的なことではあるが、スミスからマルクスの経済学の発展はほぼそういうことだったといえる。さらに他方では、多少荒っぽい見方ではあるが、経済学上の議論あるいは経済学の発展としては、19世紀後半以降経済学の議論の主たる関心は、対象のつまり資本主義の変化・発展の性格に対するものとなったのであり、

したがって、そうした議論は労働価値論を軸とするものとしては、主要なものではなかったであろう。

とはいえ、おそらく経済学の議論としていわゆる転形問題論争は20世紀の始めにきわめて中心的な位置を占め、重要な役割を果たしたということも事実である。それゆえ価値・生産価格の議論があまり重要性を持たなかったということは事実ではないだろう。しかしながら、すでに指摘されていることであるが、この論争は、その発端から労働価値論に対する疑義を含むものであった。しかも、この論争の仕掛けは、結果的にはきわめて巧妙にできていて、その疑義の解消に必要なカード〔手続き〕は、疑義の提起者のものであり、そのカードを用いて解決すると疑義の対象そのものが姿を消してしまうようになっていたといえそうなのである。

つまり、転形問題は、ボルトキューヴィチ以降森嶋＝シートンの解にいたり一つの解決を見たときとされるわけであるが、その解決自身がさらに労働価値論の理解に対する別の批判と別の疑義が提起されるという契機とされるわけであって、明らかに問題の本体自体が転形してしまうというわけである。もっとも、ボルトキューヴィチによって開かれたこの問題の解決方法は、すでにその当初からそうした運命を帯びていたといえるのかもしれない。すなわち、3部門分割、価値計算および生産価格方程式に必然的な方程式数と未知数の数から生ずる事柄である。

この方程式数と未知数の数の不一致は、今度はその調整自体が一種自己目的になっていて、価値次元と価格次元の問題という本来の事柄からは議論の性質が変わったのではないかともいえそうなのである。調整あるいは仮説といえるのかもしれないが、未知数の数の解決としてさまざまな想定が試みられた。総価値＝総生産価格、総剰余価値＝総利潤あるいは第3部門（奢侈品生産部門）の社会的平均資本構成などはそのような想定・仮説であって、その仮説によって数式の問題に限れば解決されたといえそうであるにしても、やはり疑義を消し去ることはならなかった。

したがって、今日でも依然として提出されているこの問題に関する見地

をそれぞれ有意味な議論であるとする、スミスが結果的に示したアイデアがきわめて先見的であったといえそうである。あるいは、たんに結果論としてだけであれば、すでに彼は労働価値論についてその性格を十分見極めていたといえるのかもしれない。すなわち、論理的には、彼が説いた二面的価値規定はいわば価値論について次元的に異なる相を明らかにしなければならないことを示唆していたのであり、さらにその歴史的転換の視点はそうした次元の区分であると同時にそうした転換が価格次元の展開として与えられることを指示したとみうるのである。

そのうえ、学説の展開もそれほどの飛躍は許さないものなのかもしれない。つまり、前者の二面的価値規定との関連でいえば、そもそも、その二面を一面化したさいに、価値と価格との計量的視点からの問題解決を提起したのはD. リカードであった。あるいはむしろ、その一面化という課題の解決を進めた結果、計量的な手法が必然化したということでもあろう。つまり、貨幣の不変的価値尺度という解決方法は、価値・価格の量的通約性という認識のもとに提出されたことは明白であり、したがってよく知られているP. Sraffaのリカード評価は結果的にはこのリカードの解決の特徴を見ぬいたものだといえるのであろう。ただ、スラッファの功績であるにしろ、スミスと対比すれば、時代的にはリカード的な解決が受け入れられるような資本主義的な商品経済の発展がその解決ともども認められるべきだということにもなるのかもしれない。

それゆえ、スミス、リカードこの二人を対比すると、価値・価格をめぐる今日の議論の原形はすでに整えられていたといえるのであろう。おそらく、マルクスがこの先行者の論理に潜む性質の相違について十分認識していたといえそうにはなからう。もちろん、まったく気付いていなかったといおうとしているわけではない。むしろ、彼の経済学の成立過程からすれば、次第に気付くことになっていくとすべきであろう。しかし、いずれにしても、十分認識するところまで至らなかった、または認識することになったとしても、解決しえなかったということは明らかなのであるが。



それにしても、他面では、マルクスがきわめて重要な視点を提起し独自の考察を進めたことも明らかである。彼の学説史的検討は別にして、そうした彼の貢献のゆえんについて尋ねるとするなら、やはり自律的な商品経済の発展・運動についての彼の認識が無視されてはならないことになる。それは、19世紀に他の理論的解明を積極的に展開せしめなかったという事実から判断できることであろう。じっさい、彼が「原理」の論証に必要なものは、「過程の純粋な進行を保証する」条件ともいふべき「典型的な場所」たるイギリスであったのであるが、これほど明確に「歴史」の論理化に必要な手続きを提示した人物は他にいない。

市場経済の拡大過程という意味では、いわゆる地理上の発見によってもたらされた世界史的過程によって、価格関係に集約される傾向が示されることになった。つまり、歴史の理論化はそれに先行するいわば器作りの過程があり、この価格関係こそその世界史的過程を主導したヨーロッパ世界において重商主義すなわち国民国家づくりを必然化せしめた。「植民制度、国債制度、近代的な租税制度および保護制度」として特徴づけられる周知の歴史的過程がそれであって、歴史の理論化として有効な自律的純粋化傾向は、この枠組みの形成とともに始めて可能になった。したがって、これはいわば diachronic に純粋化と国民国家形成とが同時進行的であったとすることが可能だということである。

そこで、スミスが「諸国民の富」と表現したことは、じつは意外に歴史の傾向をとらえていたことになる。マルクスは、それを経済学の認識方法として明確に表現したのである。こうした二重の過程が歴史の論理化の基底に存在するということから、傾向は自律的かつ自立的というわけである。それゆえ、純粋化傾向の空間的あるいは synchronic の表現は諸国民国家群の編成として理解されてよく、そこでまたそうした編成の関連が具体的には自由貿易関係として現わされたことも当然になる。

- (1) スミスを視野に入れるということではないにしろ、労働価値論を基本にす

る原理的議論の最要点を取り上げれば、転化・転形問題になるとしてよいであろう。その点は、例えばごく最近の学界機関誌（『経済理論学会第34号』1997年）においても価値論をめぐる議論について転形問題に焦点を当てた研究を取り上げている。それは、たまたまそうなったのか、あるいはそのテーマでまとめるということであったのかは知るところではないが、しかしいずれにしろ、今日でも価値論をめぐる議論のうちで最重要領域として扱われているとしてよいのであろう。しかし、こうした見方はともかくとして、議論そのものとしては、転化・転形問題がその時代時代に背負った経緯は独自のものでありながら依然として一貫したものがあるといえそうである。

その点では例えば、R. L. Meek が彼の論文『『転化問題』についての若干の覚え書き』（in 'The Economic Journal', March 1956. 所収、時永淑訳『経済学とイデオロギー』法政大学出版局1969年）で P. Sweezy に言及しつつ提起している問題もその本筋からして、あまり変わりはないといえそうである。そのうえ、興味深いのは、彼が周知の「総価値＝総生産価格」の命題について一つの論証を与えているということとは別に独自の指摘を行っていることである。「この論文で、やろうとすることは三つある。……第3に、マルクスの議論のなかで、『転化問題』が解決された後にもまだ残るところの重大なギャップについて、多少言及する。」（同上訳、216ページ。）

このギャップとは、価値の生産価格への転化の数学的例証は「マルクスの分析におけるギャップの一部をうめるにすぎない」のであり、残りの部分をうめるためには「数学よりもむしろ経済史と方法論に頼らねばならない。」というの、「マルクスの一般的な経済学の方法によれば、価値からの価格の導出は、論理的過程であると同様に歴史的過程であるとなさなければならない」（以上、同前訳、232ページ）からである。そして、この歴史的方法という視点からすると、「マルクスは、本当のところ、伝統的な古典派的着想——すなわち、交換比率はアダムスミスという『初期未開の社会状態』においてのみ対象化された労働の比率に比例するという着想——を継承した以上にはほとんどやっていない、という主張もありえよう」（同前訳、235ページ）と指摘されるのである。ミークの指摘は、この問題に対する議論の伝統を十分背負っているのであるが、さきのスミスに関する言及は、労働価値論そのものの問題と転化問題との関係として示唆を十分与えていたといえるものであった。前者は、要するにマルクスの「商品論」における労働価値論の論証に関する問題に帰着するのであって、これは明確に古典派の伝統に属するといえるものである。後者は、価格機構と利潤率の均等化とが資本主義の景気循環と不可分であるとするなら、そうした意味での資本主義の

「歴史」とともに解決されるべきことだということになる。もちろんこの後者に関する点は議論を必要とするところである。

- (2) 周知の通り、R.Hilferding は彼の主著“Das Finanzkapital”を次のように位置づけていた。すなわち、彼の著書は「W. ベティに始まりマルクスにおいてその最高の表現を見出す古典派経済学の理論体系に組み込もう」とする意図によって仕上げられたものだ、と。したがって、彼はかなり明白に、学説の発展と理論の発展とを結び付けていたのであり、その結果、価値論・(生産) 価格論についても彼が分析の主対象とした独占価格にいたる一連の歴史的発展過程において考察されるものとしていた。「商品生産社会」, 「産業資本」段階, 「金融資本」段階というように区分されて論じられている事柄である。こうした彼の考察方法は、基本的には「原理」的論理としての枠内できわめてはっきりと批判されてきた。

しかしながら、価値の生産価格への転化あるいは価値と生産価格関係の理論的処理として欠陥を持つとしても、歴史が独自の「価格」関係を必然化しているという点では、したがってその限りでの論理と歴史の関係という点では、彼の金融資本分析の評価とは別に、その批判には留保が必要であろう。つまりこのように指摘することが可能なのかもしれない。本来、[労働] 価値論は、歴史の理論化にとって不可欠な装置なのであり、したがって、「価値」の理論的認識の発展自身がすでに一つの歴史的過程に属しているという事情ともども価値・価格関係の認識体系もその都度歴史的に限定されているとせざるをえない、ということである。

もちろん、この歴史の認識については、従来、純化傾向という一種の歯止めがあって、その歴史的限定によって「原理」も限定されていた。しかし、その純化傾向もいわば歴史の区切りの意味で用いられているのであって、その区切りの有意味な「原理」的処理を免れるわけではないように思われる。ヒルファディングがどれほど意識的であったかどうかはともかくとして、当然ながら彼の考察には、同時期の転形問題論争の数量的整合性という解法とは別に、ミークの指摘する「歴史的過程」への着目という意味で、学説史的・方法的認識に独自の貢献が含まれていたと評価してもよさそうなのである。

- (3) 資本主義の歴史的展開の諸過程をどう特徴づけるのかについての主張は多様化している。ここでは、それに関する諸説を検討するものではないが、「原理」に関わる純化傾向とこれとの関係で考察された歴史的展開についての見地も最近ではかなり多面的である。純化傾向自身についてもすでに、そうしたものとして独自に特徴づけることに疑問が提示されてさえている。例えば、市場がそれ自身で市場の拡大と社会の拡大とを適合的に対応させうる

時期は、必ずしも特定の時期だけとは限らない、という形で純化傾向を——再現可能な歴史的傾向として——捉え直す考え方もある（伊藤 誠『逆流する資本主義』東洋経済新報社、1990）。

純粋化傾向を、市場経済の拡大傾向と同一視する主張は、必ずしも目新しいものではない。おそらく、商品経済の拡大と社会の拡大とが一致して進行する限りでは、純粋化傾向の「逆転」あるいは「鈍化」とはいえないであろう。この後者の表現との関係で「純粋化」を考慮すると、先のようにも主張されることになる。さらに、この拡大傾向をそうしたものと決めうる論点を、例えば資本主義経済の根幹をなす労働力商品の在り方の変化から提起しているものもある（西部 忠「労働力の外部商品化・内部商品化・一般商品化」、所収；経済理論学会編『アジア工業化と世界資本主義』、経済理論学会年報第34集、青木書店、1997年）。資本主義の非市場的外部要因依存の労働力商品調達システムから市場内の処理・調達システムへの発展、つまり「現代資本主義においては労働力が内部商品化を越え一般商品化する——擬似的な資本主義的商品になる——傾向があるという仮説」が考慮されてよいという主張である。そうした「仮説」は、したがってこのように判断することになる。すなわち、「労働力商品がその究極形態である一般商品化に到達すると、資本主義経済は、再生産不可能な自然環境や天然資源を除けば、あらゆる商品生産を利潤原理により調整しうる自律的な経済体系へと進化することになる。……その内奥に位置する労働力商品が一般商品へと接近し、近代的共同体としての家族を解体するという意味で純粋化するのである。」（以上、前掲論文、前出書、151、157ページ）

現代の市場経済的現象について、このような判断を持つことは、それほど異様なことではないといえそうである。「自律」性や「純粋化」ということばを用いることが可能かどうかは別にしてであるが。例えば「福祉国家」とかあるいは財政的サポートシステムとか、さらに、国際的な金融安定装置とかいうファシリティあつての市場拡大化を「自律」とか「純粋化」とするのは無理だという指摘は可能なはずだからである。しかしいづれにしろ、そうした「仮説」とともに、労働価値論の経済学においても「歴史」は次第に synchronic な次元の特異点のように処理されることになりそうである。

- (4) 純粋化傾向とは何かを、改めて検討した注目すべき論考には、佐美光彦「段階論とは何か」（東京大学『経済学論集』第60巻第3号、1994年）がある。純粋化傾向に不可欠な「自律化」および「自立化」の区別、両者の関連について明快な考察が行われている。おそらく、「原理」に不可欠な歴史的

傾向について宇野弘蔵氏が強調し、かつ幾分不文明であったその性格が的確に整理されているとあってよいのであろう。

しかし、国民国家の自由貿易連合としての「自立化」が、19世紀に「自律化」を保証する枠組みとしての条件であったとしてよいのであろうが、その条件が「自律化」の絶対条件であるかどうかは別問題のように思われる。つまり、別の枠組みでは「自律化」は有りえないのかどうかということである。おそらく、現代においてもなお「純粋化」傾向＝自律化を主張する場合、こうした問題が介在して、これを認める議論においては、それは相対的な条件にすぎないとしているとあってよいのであろう。とはいえ、後論するように、学説史的にみると労働価値論の経済学では、自律化＝純粋化に関しては、「自立」型を条件とせざるをえないはずなのである。

## 2. 「転化」論の成り立ち方

D. リカードがスミスの労働価値論を引き継いだことは、同時にスミスの問題も引き継いだということでもあった。

もちろん、彼自身は、スミスの問題の解決を引き受けたということではあらずである。だが、彼の「原理」の労働価値法則の「修正論」に見られるように、問題そのものをむしろ鮮明に提示しているのであって、一つの解決——つまりは「転形問題」の「方程式」的解法の原形としての——がよりモダンな形での問題でもあることを如実に示すことになったのである。しかも、リカードの解決に特徴的としてよく指摘されることは、その労働価値論の非歴史的または超歴史的抽象である。したがって、仮に転形問題の解法に対し労働価値論自身の性格が必然的に関係しているとすれば、リカードの解法はすでに、彼が継承したとするスミスの労働価値論とはかなり異なるそれに依拠していることを暗示しているとしてもよさそうである。

すなわち、よく指摘されたように、リカードは彼の「原理」を主著の第1章から第7章まで、つまり「価値について」から「外国貿易について」までにわたって明らかにした。ところが、彼がその労働価値論に基づいて

「原理」を一貫させている範囲は第6章「利潤について」までであって、第7章「外国貿易について」は、いわゆる比較生産費説によって説かれており、原理としては首尾一貫してはいないということである。さらに、それにしてもリカードがこの部分を「原理」としたゆえんについては、いわば「利潤論」の延長線で、外国貿易が資本＝利潤の増減にいかに関係しているかを明らかにする意図からであったとされている。

おそらく、その細部への議論は別にして、「利潤論」との関係での説明は十分妥当なものであろう。しかしながら、その理論の鋭さで「まるで alien」とまで評された<sup>(1)</sup>リカードが、原理の論理の要に据えた労働価値論との関係に十分顧慮することなく、「利潤」論との関係で不可避であるとして比較生産費説を取り上げたというのもそれほどすっきりするものではないだろう。もちろん、第7章という限られた範囲での論理に何かとりわけ重要な理論的混乱があるということではない。あるいは、その点がここでの問題というわけではない。

リカードの労働価値論の抽象は、十分知られているように、いわば人類史の第2段階、技術加工労働手段利用による生活手段の獲得というところからである。つまり、弓矢に木船の段階である。彼がそうした抽象を行ったのは、明らかなように、スミスの労働価値論が「初期未開の社会状態」によって説かれていたことに対応するからであろう。また、これも明らかなように、彼がそう認識したかどうかはともかくとして、「原始時代の漁夫と猟師」<sup>(2)</sup>をもとに労働価値論を説かざるをえなかったゆえんは、そこから「歴史」が出発させられるべきだったからである。

すなわち、その「原始時代」がよく表現されるいわゆる「採取」的な「原始時代」からではなく「漁夫と猟師」からであったのもリカードの理論展開の組み立てに必要な「歴史」のためであった。別の言い方をすれば、彼の理解による資本と労働との組み合わせの変化が、すなわち「資本回収速度」の相違が形成されてくる「歴史」のためであった。したがって、彼の価値＝（生産）価格問題の解決もスミスに即している限りでは、

「初期未開」とそれ以降の関係として説かれているというようにみてもよいことになる。

おそらく、第7章が労働価値論ではなく比較生産費説にならざるをえなかったのは、やはりよく指摘されるように、限定され、囲われた市場つまり「国民国家」の内部でのみ可能な資本と労働の市場的自由の「体制・秩序」という条件の有無という区別からであっただろう。それゆえ、逆に見れば、リカードにとっては上述の「歴史」は同時に市場的自由「体制」の、つまりは「国民国家」形成の過程でもありとみなしてもよいのかもしれない。そこまでは読みすぎであるとしても、少なくとも第7章を「原理」としたことによって、そのような結果をもたらしていることは間違いないだろう。

とはいえ、固有の「原理」の議論に立ち返って見ると、この天才の思考過程も一筋縄ではいかないことになっていることは認めざるをえない。誰の目にも、弓矢や木船としての資本や漁師・漁夫としての労働力にその自由移動の「抽象」を与えることと、「一国内において諸商品の相対価値を支配する法則は、2国またはそれ以上の国々の間での交換を支配しはしない」<sup>(3)</sup>として「比較生産費説」を理論化する思考のコンテクストはきわめて独特である。もっとも、前者のような抽象について見れば、A. スミスの継承者としてのリカードとしてはごく当然のことだということなのだろう。つまり、そのスミスの労働価値論は‘Labour was the first price, the original purchase-money’としたわけであるし、よく指摘されるように、そうしたことは、一種自然法的抽象であることを指示しているというわけであり、その点で、この近代的認識の枠組みから自由であったとはいえ、ないリカードにもごく当然のごとく受け入れられたのである<sup>(4)</sup>。

したがって、端的に言えば、漁師・漁夫の original purchase-money としての労働価値論は、近代自然法的抽象という認識論的背景から描かれていて、その限りでは、リカードの価値・価格論も市場的抽象との一種接ぎ木的な構造にならざるをえなかったといえよう。もちろん、そうである

としても、この点についてはこういったほうが妥当なのかもしれない。つまり、リカードの時代になると、この近代的認識は、その抽象性という意味ではすでに経済学の中にその「転化問題」として確固とした位置を占めうることにもなりつつあったのだろう、と。

すなわち、ごく当り前のことであるが、古典派の労働価値論は、真に経済学的抽象そのものとして成立したものではなかった。近代自然法の中から、例えばよく指摘されるようにロックの所有論やヒュームの経済学などと関係しながら、形成されてきた。近代自然法＝近代社会認識の一環のうちに発見された概念なのである。確かに、A. スミスではそれは経済学的に精練され始めたわけであるが、いまだ十分そうした認識の経緯を背負っていたといつてよいはずなのである<sup>(4)</sup>。

したがって、弓矢や小船、漁夫や猟師というところから組み立てられているD. リカードの記述は、経済学それ自身としては奇妙であるとしても、まさにそうした仕掛けから転化問題を導き出した点において、スミスを引継ぎ、同時にそれをより精練した形で労働価値論の経済学として「原理」として据えることに成功したといつてよいのであろう。だが、より厳しく見れば、労働価値論は、依然として彼らのそうした構造の中でこそその有効性を主張しえたのであって、その構造の特徴は、まったくこのリカードの転化論の構造とそれ自身不可分ではなかったはずであり、したがってここにその性格は明確にされているとしなければならないと考えられよう。

つまり、リカードは、漁夫や猟師および結局は彼らの労働の所産たる弓矢と小船、こうした確実な紛れようもない実体としての労働によってこそ、スミスを超えて理論の一貫性や確実な歴史展開が可能だとした。彼にこうした確実な実体に基づく認識構造を供給したのは、じつはスミスでありかつまたスミスを可能にした自然法的認識であったといえようが、むしろその認識論的性格は、いっそう鮮明にされたと判断できよう。

それゆえ、こうした環境で成立したリカード的転化論を取り上げれば、それは紛れもなく確実な実体の量的関係に他ならず、その実体の量的抽象



の処理こそが解かれる問題としてのみ扱われたのだといえる。したがって、こうした確実な実体を導き出して理論を構築するという方法こそが近代自然法的認識と無関係ではないとするならば、ここにも明らかに検討されるべき問題が生じてくるとせざるをえない。すなわち、それはスミスの問題提起に立ち返るべき問題である。

A. スミスが明らかにした労働価値論が「二面的」と特徴づけられるのは一般的であり、かつその特徴づけに異論が出されることはほとんどないほど確定的であろう。また同時に、リカードがその二面性を不確実なものとみなしたことも疑いなく確実なこととしてよいであろう。その不確実さは、前述のように、彼の厳密な議論の筋道からすれば、確実な労働実体の把握の問題だったといってよい。しかしながら、このリカードの判断ということになると、必ずしも確実な判断、十分な吟味の結果とはいえない。通常解説されるように、それがT.R. マルサスの批判要因だとしてもよいのであるが、それだけではない。

スミスが、original purchase-money と表現した彼の[投下]労働価値論は、おそらく彼の好む語法からすれば natural and original と表現してもよいほどいわば啓蒙的・自然必然的実在性の主体としてよいのであり、その意味では、リカードの認識も可能であった。ところが、money という表現がたとえ一種の比喩だとしても、そうした比喩を用いようとする意図・含意があろう。おそらくそれは、労働＝価値に対し何か確実な実体そのものという判断から距離を置こうとするものである。重商主義的貨幣観の否定と「貨幣」と表現することによって可能な人・物の関係性の担い手としての意味が与えられているとしてよいであろう。[支配]労働価値論によって補われなければならなかったのもそのためである。

したがって、スミスのこうした認識の側面からすると、リカードにとっては今度はその関係性によって担われる不確実性が問題になるというわけである。それゆえ、この両者の関係から「転化」問題成立のゆえんをみるならば、少なくとも或る余地を持った量的関係を容れている論理に対する

厳密な量的実体関係の論理の形成というかたちで比較できよう。こうした対比が可能だとすると、前者が F. A. ハイエクによってその「自由」度のために評価され継承された（と信じられている）のも当然であるし、後者がそのより「必然」的なるゆえをもって、K. マルクスによって継承された（と明確に信じられている）という関係になるのも当然であろう。

したがって、学説史的にはこのように特徴づけることが可能なのかも知れない。すなわち、「転化」論という問題の発見は、経済理論の形成に必然的であったが、それは同時に、発見された問題に対する叙述が経済学の持つ bisect 的な根本的性格の表現にならざるをえなかった、と。つまり、これは「市場経済」ないし「市場」社会の性格に対する認識の差異と同じことであり、この認識の差異が、その考察対象の性格を表現しているものだとすれば、「転化」論という論理の結び付け方は本来的にそれ自身の問題とは考えにくいということにならないか、ということでもあった<sup>(6)</sup>。

こうした判断は、おそらく特別なことではない。まさにこうした経緯があったからこそ、学説史的にはマルクスの理論的特質も成立したといえよう。彼の理論の枠組みからいえば、「形態」とか「実体」とかとしてひとまず解決の試みが提起されたことになる。もっとも、そのさい、よく指摘されているように、スミスとリカードという彼の先行者を置いてみると、マルクスの先行者に対する評価がより後者に積極的であったという事情が、同時に彼のこの問題に対する解決の性格を示すことになったとみられよう<sup>(7)</sup>。

もっとも、スミスから出発したこの問題は、リカードにとって 50 年、マルクスにとってはすでに 100 年後に解決すべき事柄であった。したがって、当然ながら、彼らが直面している経済的システム自体非常に変化していた。よく対比されるように、それらは、例えばマニュファクチュア、機械的産業そして機械と大工業という具合である。そして、こうしたシステムのいわば高度化は、彼らがこの問題の解決に直面しているさいに何らかの影響を与えていたことを無視することはできないであろう。

すなわち、自明なことであるが、スミスにとってはそれはいわば純粋に労働相互の関係としてであった。しかも、その関係における「私」「社会」あるいは「個」「社会」は、システムとしては非媒介的で、いわば投入経路と産出経路とが異次元として現わされていた。したがって、のちにこのような関係を、J.S. ミルが原則的な事象と歴史的独自性として解説することになる。リカードにとっては、それは相互媒介的な関係になり、機械自身労働の所産として、生きた労働にとっても相互媒介的であり、かつ可逆的である。したがって、リカード経済学ほど、社会が経済「社会」としては、労働共同体<sup>(8)</sup>であることを示しえたものはないといって差し支えないのかもしれない。

そこで、彼の労働価値論が、比較生産費理論と区別され、実質的に国民国家の枠組みをもって説かれることになったのも、その価値論の抽象と無関係ではなかったといえるだろう。あるいは、逆に、リカードのような価値論の抽象方法は、彼の時代に必然的な国民国家という枠組みに対し経済学的に統一性を与えるために見事に考案されたものだということになるのであろう。

それゆえ、抽象的にはリカードの観念としては、「不変の価値尺度」によって象徴されるように、その共同体の個別的关系は、1対1という具合に量的に対応するべき価値関係と判断されていたといえるだろう。こうした判断のもとでこそ、過去の対象化された労働と生きている労働とが直接対応させられうる。したがって、転化論の理解の仕方にもよるのであるが、見方を変えれば、リカードはこのような確実な価値の実体を明示することによって、転化問題の所在を明らかにした反面、その延長線上で、数量的均衡論の地平を垣間見せるという役割をも果たしていたといえそうである。

(1) "Mr. Ricardo seemed as if he had dropped from an other planet". Lord Henry Peter Brougham がリカードを評してこのようにいった (K. Marx

“Zur Kritik der Politischen Ökonomie”, *Karl Marx / Friedrich Engels Werke*, Band 13, S. 46.『経済学批判』, 岩波文庫 70 ページ) というのであるが、現代風にいえばこのような表現になろう。マルクスは、周知のようにそこで同時に「オーエン氏の平行四辺形」をもってリカードの社会認識を皮肉っている。そうした批判が的外れということではないが、成立途上の経済学「原理」が「社会」あるいは「国民国家」という枠組みの確定に対しどう必然的に関係しているかを明らかにすることは相当困難であっただろう。事実上のマルクスもこの問題を解決したというわけではなかった。

- (2) “Zur Kritik……”, Ebenda. 同前記, 60 ページ。マルクスも気付いていたのかもしれないが、この「原始」という抽象世界も A. スミスと D. リカードでは相当認識上の相違があったとみなすべきという点は、おそらく当然なのであろう。このことは、外見的に両者の理論展開からも窺い知ることができる。すなわち、リカードは、スミスの『諸国民の富』第 1 編第 5 章の投下労働価値論をいわば直接にそのものとして認識し、彼の理論をそこから出発させている。ところが、スミスは、当の労働価値論について、分業論を踏まえて展開している。この相違は重要であった。

つまり、両者が狩猟民族に言及しているにしても、それに対する理論的な取り扱い方はまったく異なっているのである。スミスが彼の労働価値論を *original purchase money* と表現したさい、その認識は歴史的な意味というより「本質的」とか「本来的」という点に力点が置かれていたとしてよいであろう。他方で、リカードがスミスのその規定に言及し、*the original source of exchangeable value* として表現したさい、その力点はほぼ歴史的な意味合いに置かれていてと考えてもよさそうである。もちろん、リカードも歴史それ自身の本格的な認識を背後においてそうしているわけではない。しかし、観念としては、単純な生産装備からより高度な生産装備へと、労働の所産の高度化に歴史を見ていてとしてよいであろう。

この両者の違いは、立ち入ってみれば労働価値論の考え方の違いでもあるだろう。おそらく、誰でもが承知しているように、それはスミスのいわば自由社会に対する節度としての労働価値論と、リカードの市場社会に対する計量的実体としての価値論というように分けられる。両者のこの学問に関わる経緯上からこうした色合いの違いが生じたであろうし、またマニファクチュアと機械的産業という時代的背景からも生じたであろう。そしてこの違いは、その後の経済学に対しても依然問題を提起してきたといえそうである。

- (3) “On the Principles of political Economy and Taxation”. *Works and Correspondence by David Ricardo*, vol. 1, p.100. リカードが『原理』第 7 章

を「原理」的考察の領域としかつその部分を比較生産費説で展開したことは、リカードが認識していた以上に重要なことだったかもしれない。「原理」としての非整合性に関して種々指摘することは可能であるし、また通常はそのように議論され、それぞれの評価が与えられてきた。それらについて特に問題があるわけではない。だが、それは経済学を可能にする自立性や自律性を「原理」として考察している限りであって、それらを歴史の傾向のうちを考えることになると、国民国家というような枠組みを登場させねばならず「理論」としてはそう容易な事柄ではなくなる。

先述のような現代の市場経済の拡大傾向を、「原理」の理論に有効な自律性の復活・再現と見る見解が可能だとすると、こうした見解は他方で同時に先行する国民国家の枠組みをいわば一段階低い自律性の発現とみるか、あるいは自律性は歴史的に非自律性を含みつつ繰り返すとみるかするわけであって、いづれにしる国民国家的枠組みを自律性のカウンター・カテゴリーとして考慮せざるをえないことになろう。

そのさい、例えば宇野氏の方法のように、理論・歴史を原理と発展段階論とくわして処理してきた従来方式は必ずしも有効とはみなされないだろう。そうだとすれば、その当否の結論はともかくとして、リカードが原理的展開の最後を「外国貿易について」として締めくくったことは、理論と歴史とを繋ぐという意味で一つの考え方を提示していたといえるかもしれない。

- (4) D. リカードも彼の労働価値論の主張をスミスのことばからの引用、すなわち“Labour was the first price — the original purchase-money”によって根拠付けていることはよく知られている (*Works*, vol.1, p.13)。リカードが継承したと信ずるこうしたスミスの労働価値論は、よく指摘されるように、分業論をふまえた経済学的抽象であると同時に近代啓蒙思想としての自然法の認識を背負った抽象でもあった。この近代啓蒙とか自然法とかとして特徴づけられる部分が、どこまでリカードによって引き継がれ、どの程度までより経済学的抽象として清算された——したがって非啓蒙的・非自然法的に脱却した——かを確定することは、ほとんど困難である。仮に、かなり脱却したということになったとしても、今度は両者の価値論の認識の違いが浮上せざるをえないのであり、この認識の相違は労働価値論の意味の相違をも導き出すのであって、現代風にいえば、ことばの分節としての意味の問題を考えざるをえないことになろう。

つまり、例えばこのような対比も可能なかもしれない。経済学の著書『諸国民の富』といえども、それが対象を決めて（分節して）いるのはスミスの啓蒙的（自然法学的）ことばなのであって、その限りでの価値論である。

これに対し、リカードが決めている場合には、J. Bentham を経由しているという事情も無視できないが、おそらく彼が実業界で受容した市場に対する分節機能としてのことばを通じてであろう、と。もっとも、このような議論は今度は、「経済学とイデオロギー」というような問題になり、かつ「ことばとフェティシズム」というようなところにまで及ぶことになろう。

- (5) なお、A. スミスの自然法あるいは自然神学とニュートンの (efficient cause [動力因] のみを重視した) 認識との関係から、限界革命にまで及ぶスミスの近代的 (合理的) 個人把握の影響を重視する見方もある。こうした点を含め、彼の認識論的独自性と自然法との関連については、Charles Michael Andres Clark “Economic Theory and Natural Philosophy” (Edward Elgar Publishing Limited, 1992, Vermont and London) が比較的手際よく分析している。また、きわめていいないな考察としては以下を参照されたい。田中正司『アダム・スミスの倫理学』上・下巻 (お茶の水書房, 1997) および『アダム・スミスの自然神学』 (お茶の水書房, 1993)。
- (6) 「ロビンズが、経済学を自然科学と同視するのにケインズは反発した。『ロビンズが言うところとは反対に、経済学は本質的にモラルサイエンスであって、自然科学ではありません。すなわち経済学は内政と価値判断を用いるものです』……ハロッドは……経済学は自然科学ではなく、自然科学の方法では説けないこと、そしてそれは事実に関する情報と人間性の深い理解との微妙な混合物である、と書くのである」(伊藤光晴『現代経済の理論』[経済学を問う 1], 岩波書店, 1998 年, 16~17 ページ)。1930 年代になっても経済学の性格に対する理解は重大な相違があった。あるいは、その年代でいっそうはっきり相違が確認されたというべきかもしれない。もちろん、これは経済学という学問の対象との関係についての理解の相違によっていて、経済学の歴史と同等の古くかつ新しい問題といえるのかもしれない。
- (7) 「……価値の形態そのものは商品経済に特有なものであるが、その実体をなすものは、あらゆる社会に共通なる社会的労働共同体にあることに注意しなければならない。それがまた価値関係を法則的に展開する基礎ともなるのである」(宇野弘蔵『経済原論』, 岩波全書版, 90 ページ)。
- (8) よく指摘されたように、『資本論』が商品論で労働価値論を説いたのは古典派的手法を引き継いだものである。これが労働価値論の論証として正当であったか否かについては、すでに幾多の議論が行われてきた。また、その継承ということになると、リカードとの関係が濃厚だという点もしばしば指摘されてきた。ここは、こうした問題について新たに議論を付け加えるところではないが、リカードの労働価値論は、それ自身としては或る種確実な計量

的視点からスミスを引き継いでいるという性格にあるとすると、逆にそうしたものとしての新しさがマルクスへと伝えられていったともみうるだろう。実際のところ、マルクスの経済学の成立過程から見ると、交換過程からする通約的労働価値論が説かれ、良かれ悪しかれ、もっぱら貨幣量的価値表現に対する実体量の整合性を明らかにするという範囲の抽象で議論が進められた。そのかぎりでは、まずはその確実な労働量的関係さえ主張できればよいということに力点が置かれていた。もちろん、こうした経緯と「価値形態」論という考え方の展開による彼の価値論の新たな独自性との関係については、また一種エンドレスの議論になってきた。ただ、ここで指摘しようとしているのは、確実な価値実体量という認識の範囲で、マルクスにも引き継がれた意味があるということだけである。

### 3. 歴史と転化論

F. エンゲルスが『資本論』第3巻「序文」で述べた経済学の方法から必然的な転化論の要点についての文言はあまりにも有名である。その文言の当否についてはすでに様々な議論・検討が加えられてきた。おそらく、今日依然として議論されていることのほとんどはそこでほぼ提起されていたといえるであろう。それにしても、様々な権威づけとともに擁護されたという点は別にして、先述のミークの指摘のように、その「歴史」に関わる解説については必ずしも明確にされているわけではなからう。

すなわち、商品生産、資本主義的生産というような展開としての歴史・論理の問題とは別に、ひとたび論理的解明が与えられた後に考慮すべきはずの「歴史」についてである。すでに見たように、学説の展開としては、この歴史は、或る意味で歴史・論理という経過をたどってきた。ここである意味でといっているのは、スミスにしろリカードにしろ、彼らの歴史の論理への取り込み方が相違しているからである。そうした点から見ると、エンゲルスの周知の言及は、意外にそのような事情を承知して述べているようにも思える。

エンゲルスの周知の指摘はこのようなことになっている。すなわち、マルクスについて次のようなことに基づく誤解があるが、それは「マルクスが説明している場合にあたかもそこでマルクスが定義しようとしているかのように考え、また、およそマルクスでは固定した既成の絶対的に妥当する定義が求められているかのように考える」誤解である。さらに「諸物やそれらの相互関係が固定したものとしてではなく可変的なものとしてとらえられるところでは、それらの思想的模写である諸概念もやはり変化や変形を受けるものだということ、それらは硬直した定義のなかにはめこまれるのではなく、それらの歴史的または論理的な形成過程のなかで展開されるものだということ、これはまったく自明なことである。したがってまた、なぜマルクスは第1部の冒頭では、すなわち彼が彼の歴史的な前提としての単純な商品生産から出発して次にさらにこの基礎から資本に到達しようとしているところでは、——そこではなぜ彼はまさにこの単純な商品から出発して、概念的にも歴史的にも二次的な形態、すなわちすでに資本主義的に変化した商品からは出発しないのかということも、おそらく明らかであろう」<sup>(1)</sup>。

すでに、しばしば議論されることになったこのエンゲルスの解説は、文意そのものとしてはそれほど明瞭なことになっていない。むしろ、明確に理解することは困難といえるかもしれない。しかしながら、結果的には、A. スミスまたはとりわけD. リカードが明らかにしている歴史と論理との組み合わせによる概念的規定と似た視点を現わしている。それは、マルクスの労働価値論に関してしばしば指摘されたいわゆる古典派的残滓と共通の性格にある。もっとも、その残滓も、労働価値論が何か確実な実体量であるという認識と不可分であるとするなら、おそらく、強固に主張・擁護されてきたように、残滓ではなく必然的な経済学上の継承関係なのだということになるだろう。

とはいえ、他方では、明らかなようにエンゲルスの議論はかなり微妙な主張ともなっている。それは歴史と論理の変化に関してであるが、歴史と



ともに理論の変化が生ずるということ、その理論の変化がどう決まってくるかということについては「変化」「変形」ということが指摘されているだけである。とりわけ、問題となっている労働価値論についてみれば、それはたんに歴史的発展が理論的展開に照応しているという程度の内容だとしかいえそうもない。だが、他方でその「変化」「変形」ということになると、確かな内容は与えられていないとはいえ、また多様な解釈の余地を持つものとはいえ、かなり思い切った指摘といえるかもしれない。

古典派を超えたというような議論の筋道からすれば、その変化は、おそらく形態論に繋がる議論として認められるわけであるが、歴史の変化をその指摘の主題目とするなら、事柄はそこにとどまらない。資本主義自身がエンゲルスの問題とする歴史としては絶えざる変形を生み出すという点を見無視できないからである。そうすると「思想的模写」がそのものの基軸をどう決めるのかという問題が答えられなければならない。しかも、こうした問題を孕む歴史と理論との関連に対し、「固定した既成の絶対的に妥当する定義」の否定が結び付けられているのであって、これはすでに単なる変化・変形として論ずること以上の議論になろう。

ここでは、そうした議論に立ち入るのが目的ではない。学説史上のコンテキストという観点からすれば、このエンゲルスの解説は、「歴史」と転化論という点では、先行者のこの問題への理論的対応をいっそう明確に受け止めたものだったといえそうである。あるいは、方法論的または認識論的に転化論とは歴史の問題だと整理したものと決めてよさそうである。通常指摘されてきた古典派経済学の非歴史的な性格は、歴史研究・歴史科学というような意味では間違いないとしても、経済学にとって可能なあるいは必然的な歴史の叙述という点を見無視したというわけではなかった。「原理」的論理に「歴史」が必然的であるかどうかは、もちろんそれほど明確であるわけではない。エンゲルスの注解は、周知のように、経済学における「歴史」そのものとしても「転化」理論の方法としても説得的な成功を収めたとはいえない。しかし、「歴史」と理論の関係、その理論に表わされ

る「思想的模写」としての表現の変化・変形については、古典派に代わりかつまた1870年という歴史に依存しどう構成されるのかの問題を含み、依然として重要な指摘であったといえるかもしれない<sup>(2)</sup>。

さらにまた、転化論そのものとしてではないが、価格論としてはこの「歴史」はことば以上に重要な役割を担っていたといえるかもしれない。もちろん、「ジェボンズ＝メンガー」の限界効用理論等の登場に注目していることも、その否定にもかかわらず、重要であっただろう。だがそれよりも、その歴史はもっと様々な意味を担っていたと考えられる。あるいは、担っていることを読み取る必要があったというべきなのかもしれない。

D. リカードが確実な実体量としての諸商品価値関係を問題にしたことは、別のかたちで批判された。それは例えば、「リカードと彼の追従者たちは、議論を単純化するために、しばしば人間を不変量とみなしているかのような扱い方をした」という指摘で示された。19世紀の初頭に、リカードはその著作で「異星人」とまで批評されたのであるが、その世紀の終わりにはかなり厳しい批判にさらされることになっていた。このA. Marshallのそれは、異能なりカードの抽象性の本体を適確に見抜いたといつてよいのであろう。

しかも、マーシャルが「彼らは人間の多様性を研究する努力を十分にすることが、ついになかった」と言及したさい、それが古典派経済学のみならず、経済学にとってきわめて重要な問題を孕んでいるということを指摘していたのであるが、それは同時に近代人間を扱う学問にとって共通する問題たるものだっただろう。すなわち、こうした批判の要点が、「リカードと彼の追従者たち」が市場の価格関係に表わされる事象の斉一性と同義に人間活動に一定の抽象的画一性を取り出したことにあるといつてよいとすれば、それは彼らの労働価値論の問題でもあったし、また同時にそこに確固として地位を持つ近代合理性の表現だったといわなければならない。「彼らは人間の多様性を研究する努力を十分にすることがなかった」とマーシャルは端的に述べている。確かに、この批判は正当だろう。おそらく経

経済学と「人間の多様性」という問題ほどリカードにとって疎遠な事柄はなかっただろう。しかしそれは、「彼らが最もよく知っていたのはロンドンのシティ地区の人々であった」<sup>(3)</sup>という限界のためではなかったであろう。経済学が人間の多様性に馴染む学問かどうかはきわめて重要な問題であろうが、そしてその点を検討するのがここでの課題ではないが、リカードにとっては、それは先述のように彼の「原理」を決めている労働価値論の抽象性と必然的な関係にあったといえよう。

「多様性」という議論としては、再度 A. スミスに着目しなければならない。もっとも、ここではスミスの近代的人間像を立ち上げて取り上げるというわけにはいかない。基本的にはただ労働価値論の範囲内で必要なかぎりである。明らかなように、リカードが人間を斉一的に規定したのとは対照的に、スミスは分業労働によっていわば具体的に多様に規定した。よく指摘されるように、彼はそうした多様性と 'toil and trouble' としての抽象的一様性との両面から人間を規定した。

前者について、通常は具体的有用労働＝使用価値形成労働と指摘される。基本的にはそう把握されるべきであろうが、他方では、そのために軽視される側面もあった。すなわち、「分業に基づく商業社会」という場合の「社会」についてである。スミスが「分業」と「社会」とを等置していることはよく知られており、したがってそれがまた「混同」として批判の対象とされたことも周知である。しかしそのさい、その混同の背後にある「組織」すなわち労働編成上の情報やそうした組織が「社会」のコアとして機能するための情報という社会の経済的機能構成上の普遍的要件で介在している。そして、事実上、スミスがそれに注意を向けていたという点はかなり重要であったが、それを特に取り上げ論ずるということにはなっていなかった。

とはいえ、スミスの注意の向け方は、やはり独特であったし、かつ明確に今日のいわゆる「情報」に関する論理という認識レベルで判断することにはならない。すでに別のところでも取り上げたように<sup>(4)</sup>、スミスの近代的人間像の把握からすれば、彼はそうした要件を、端的には「交換性向」

を内在させる「分業的個人」というかたちで満たしうるものとした、と判断して良いように思われる。彼においては、この「交換性向」は文字どおりの市場的交換を意味しただけではなく、また同時に「情報」として人間相互の位置と行為とを確定するコンテンツをなしていた。彼はそれをただ徹底的に「個人」に内在させて明らかにしようとしていて、そこに彼の主張に対する理解の困難があった。

他方、D. リカードは、A. マーシャルの指摘のように、ただ「シティ地区の人々」を知っていただけだったということかどうかは不明であるが、上記のようなスミスの独自の近代的認識について着目することはなかった。したがって、彼が市場の価格現象と人間の活動とをきわめて機械的に対応させているように見えるのも、おそらく、スミスとは異なるステージを、すなわち「シティ」というより産業革命の所産としてのメカニズムとそれに対応する合理性をいわば一元的情報として「社会」を把握したに違いないであろう。その意味で、彼においては、「個人」の独自の存在としても、またその個人の集合体である組織やそれをコアとする相互関係においても、情報という次元でとりわけ注目しているかのような言及は見出せないことになった。

ところで、こうした側面について先進的かつ自覚的に取り組んだのが K. マルクスだといってよいであろう。初期には「交易関係」(Verkehrverhältnis)として、後には「流通形態」として取り出し考察したものは、すでに十分認められているように、紛れもなくコミュニケーションと性格づけてよい。スミスが original purchase-money として表現しようとしたことの少なくとも一部分は、マルクスが「流通形態」によって明らかにしていることの一部分と共通する。もの(対象)を通ずる人間相互の情報の流れである。

いまここでこの形態論それ自身を検討することが目的ではない。しかし、この形態論がマルクスの体系にとって先行者のなしえなかった独自の機構解析を可能とした。すなわち、「分業」とか「機械」とかによってそれぞ

れ独自に主張された労働価値論との関係では、彼は「資本の流通過程」という着想によって、それをいわば可能な限り豊富化した。おそらくこのようにいうことができるだろう。すなわち、彼の体系では、先行者によって抽象された価値形成的労働が単なる個別労働としてではなく、ネットワークの結節点としてのものであり、同時にまたそのネットワーク形成能力の担い手でもある、つまり「情報」と共存することでのみ価値形成が可能なものである点を明らかにすることになった。

先行者を超えてマルクスにそうした解明を可能とさせたのはあるいはそうした解明を必要とさせたのは、やはり歴史の発展だったと考えざるをえないだろう。少なくとも、学説史的にみてそう判断することは可能であろう。よく指摘されるように、マルクスの「批判体系」の直接的先行者たるリカードも、機械制大工業の本格的展開を検討することはできなかった。したがって、マルクスの先行者たちにおいては、「資本の流通過程」のごとき個別資本の機能に基づく社会のネットワーク構成に対する固有の考察は進められてはいない<sup>(5)</sup>。

もっとも、マルクスの体系でのこの「資本の流通過程」それ自身についてみれば、その理論的展開に対する考察作業は他の分野に比べて容易ではなかったはずであるし、またその完成度も低かった。そうした事情は、きわめて良く知られているように、この領域に関する彼の研究がかなり容易ではなかったことを示すことになっていた。彼の困難は、この対象領域に関する先行者の研究蓄積の不足ということも介在したであろうが、また他面では、資本・労働という市場経済の構成要因が同時に歴史的展開を示す「社会」の規定者だということであって、搾取論への傾斜と物神化論的観点との関係などが介在し、論理的整理にかなりの困難が横たわっていたのであろう<sup>(6)</sup>。

さらに、19世紀最後の四半世紀ということでは、経済学はこうした点にさほど異なる認識を持ったわけではなかった。リカードに対して人間の多様性認識の欠如を批判したマーシャルは、こう指摘したのであった。

「19世紀の進行につれて生物学の集団は徐々にその進路を開拓しつつあった。そして人々は有機的な成長の本質についてより明瞭な観念を獲得しつつあった。科学の対象が異なった発展の段階を通過するならば、一つの段階に適用される法則が修正されることなしに他の段階に適用できることは希であること、科学の法則はそれが取り扱う対象の発展に即応した発展を持たなければならないことを人々は学びつつあった」<sup>(7)</sup>。

もちろん、これはきわめてよく知られた進化論的経済学という独自の視点から歴史の変化を捉えたものである。しかし、その当否は別にして、つまりその着想の妥当性はひとまずおくとしても、彼にこのような捉え方をさせていること自身むしろ対象の発展・変化だったといつてよいであろう。したがってまた、このような指摘もなされたのである。

「産業資本は、資本の存在様式のうち、剰余価値または剰余生産物の取得だけではなく同時にその創造も資本の機能であるところの唯一の存在様式である。だからそれは生産の資本主義的性格を条件とする。産業資本の存在は、資本家と賃金労働者との階級対立の存在を含んでいる。産業資本が社会的生産を支配してゆくにつれて、労働過程の技術と社会的組織とが変革されて行き、したがってまた社会の経済的・歴史的型が変革されてゆく。産業資本に先立って、すでに過ぎ去ったかまたはもはや没落しつつある社会的生産状態のなかで出現した別の種類の資本は、産業資本に従属させられて自分の諸機能の機構を産業資本に適応するように変えられるだけでなく、ただ産業資本を基礎としてのみ運動するようになり、したがって、それら自身のこの基礎と生死存亡をともにするようになる」<sup>(8)</sup>。

これもかなり進化論的認識を含んでいるとまではいえないにしろ、やはり対象の歴史的変革＝機構・組織の高度化の認識の必要性に言及することになっている。しかしながら、両者には共通する認識があって、それは、一方では「有機的な成長」であり、他方では「労働過程の技術と社会的組織とが変革」されるということである。いずれにしろ、この「成長」ないし「変革」は社会に担い手を固定的に留めるといふ認識を否定するもので

あろう。しかも、マルクスの理解からすれば、そうした「変革」過程は当然「産業資本を基礎としてのみ運動する」過程のうちに行われることになるのである。

したがって、価値形式的とされる労働も資本という担い手によって形成される「組織」「情報」から新たな意味を与えられるのであり、あるいはまたその変革過程によって選択的に変化・決定されてくることにならざるをえない。しかも、この過程の主体である資本に即してみれば、その変化・変革は、「労働過程」に對しいわば市場経済的特殊性を通じて遂行される。言い換えれば、特殊な形態を通じて実現される。いまここでその点について特に論ずるものではないが、両者の関係をよく表わしているのが「流通費」ということになろう。そこでは、形態による社会関係＝情報・ネットワークの実現ということの独自性とその理論的規定の意味がもっとも典型的に示されている。

おそらく、「資本の流通過程」として論じられた領域は、基本的には以上のような理解を否定するものではないであろう。そうだとすると、学説史的に見ても、基本的にはそれが、先行者が明らかにしえなかった市場「社会」に関する「歴史」的展開の独自性の解明のため、いっそう重視されるべきだとしてよいであろう。

(1) Karl Marx "Das Kapital", 'Karl Marx/Friedrich Engels Werke', Bd. 25, S. 20.

(2) もちろん、F.エンゲルスによるこの理論・歴史説はすでに多くの批判的検討が加えられてきた。宇野弘蔵氏による原理・段階論の提唱は、エンゲルスの解説に含まれる誤りを基本的に克服したものとよい。しかしながら、転化論それ自身について、あるいはまた歴史的に決められている原理における「歴史」の決め方については必ずしも十分明らかにされたとはいえない。後者についてみれば、景気循環論にその意味が付与されていたとあってよいのかもしれないが、労働力の商品化に絞られた根本についてはともかく、その「機構」についてはなお「歴史」について考慮されてよいと思われる。

(3) 以上, Alfred Marshall "Principle of Economics, an introductory

volume”, 8th ed., London, 1956, p. 630. 永澤越郎訳『経済学原理』I, 岩波ブックセンター-信山社, 1975年, 278ページ。

- (4) スミスについて情報や機能ということの問題にすれば、そこには当然ながら彼の近代的人間像の把握との関係が介在することになる。そうした点の幾分かについてすでに考察を試みた。拙稿「A. スミスの Homo Economicus について」(『経済志林』第61巻第2号, 1993年)を参照されたい。
- (5) 「新古典派経済学では、企業は、労働・機械設備・土地などのサービス、原料、中間生産物を投入し、市場で販売可能な生産物かサービスを産出する、純粋な技術的な存在と考えられている。そして、その中身は、経済学の埒外にあるエンジニアリングで決まると想定され、ブラック・ボックスとして扱われる。企業家は、利潤を最大にするように、このブラック・ボックスへの投入量を調整し、そこから取り出されうる産出物を市場で販売する。したがって、企業の投入量や産出量は、市場価格をパラメーターとして完全に定まりうることとなる。すなわち、経済学に意味のある資源配分のコーディネーションは、価格を媒体として、市場においてのみ行われるということになる。/しかし、純粋に技術的な投入・産出の関数と見られる企業の活動も、実はそれにかかわる人々の情報処理活動の差異によって、さまざまに違った結果を生み出す。言い換えれば、企業内部におけるコーディネーションの違いがさまざまな経済活動の間の生産性の格差を生み出す重要な要因となっている可能性がある。さもなければ、同一産業において、異なった企業・異なった経済の間に競争力の違いが出てくることはないであろう」(青木昌彦『経済システムの進化と多元性』東洋経済新報社, 1995年, 38ページ。/は改行を示す)。

マルクスの資本主義分析には、概念的な構成は異なるにしろ、こうした点について学説史的には一定程度貢献しうる内容を作り出していたように思える。もっとも、その後の研究にそれが十分生かされたかどうかは別問題である。

- (6) 「生産に生産手段の姿で前貸しされた資本価値も生活手段の姿で前貸しされた資本価値もここでは[ウェーランドの見解では]一様に生産物の価値のなかに再現する。こうして、資本主義的生産過程の完全な神秘化は首尾よくなしとげられて生産物のなかにある剰余価値の起原はすっかり隠されてしまうのである。/さらにまた、こうして、社会的生産過程で諸物に刻印される社会的な経済的性格を、これらのものの素材的性質から生ずる自然的な性格に転化させるところの、ブルジョア経済学特有の物神崇拜が完成されるのである」(A.a.O., Bd.24, S. 227~228)。



これは、「固定資本と流動資本に関する諸学説」と題された個所で述べられているのだが、ここには「資本の流通過程」で扱われている部分に対するマルクスの理論的判断の一面が示されている。ここでその功罪を検討しようとするものではない。しかし、その判断を必ずしも否定する必要はないにしろ、他方で、積極的に展開すべき論点を制約した可能性もある。

ちなみに、きちんと調べたというわけではないが、マルクスの『資本論』体系に関する研究作業のなかでは第2部についての研究が——その第3編は別にして——きわだって少なかったのではないかと推察される。おそらく、研究者個人としてもその研究分野のなかではこの個所については比較的注意を向けることは少なかったであろう。その理由については、上記のようなマルクスの視点とともども、資本家・企業の活動領域に対するものとして軽視されることとなったのかもしれない。

「協業は資本家を多数の労働者の監督者とし、マニュファクチュアはその組織者とするといつてよいのであるが、機械的大工業にあつては多数の労働者の監督や組織も機械を通して行われることになり、資本家はいわば権力者になる」(宇野弘蔵『経済原論』, 前出書, 74 ページ)。さらにまた、こうした直接的生産過程の分析から導き出される判断によって意外に影響されたということもあるかもしれない。その結果意図せざる「ブラック・ボックス」を作り出したかもしれない。

(7) A. Marshall, op. cit., p 631. 前出訳書, 282 ページ。

(8) K. Marx, a.a.O., Bd.24, S. 61.

#### 4. おわりに

学説史的には、こうした疑問が生じやすいのかもしれない。すなわち、経済学には矛盾した性格が内包されており、したがって何か「固定的」理論基準によって論理体系を作り出すことには無理が伴う、したがって本来的に「固定的」理論は存在しえないだろう、と。もちろん、こうした疑問には根拠があつて、その第一が理論基準を可能にしている対象が同時に「歴史」という変化要因だからである。

さらに、「原理」と「歴史」という関係については、経済学は絶えず意識していて、1930年代を代表する理論家たちもその解決にそれぞれの考

え方を提起したのであった。しかしながら、そのどれもが、確定的な成功を収めたとは言いがたいであろう。或る時期に、周知のシュムペーターによる entrepreneurs の精神が重用されたが、他方で、組織・情報に力点が置かれるという具合でもある。もちろん、ハイエクに代表される「自由主義」も依然として重視されている。

しかし、こうした問題に対し、そのように自覚されてきたとってよいのであろうが、マルクスの考察がいわばもっとも得意とする性格のものであったはずであり、そうでありながら、明らかに成功したと言いがたいということであれば、おそらく理論体系としてもかなりの再検討が必要であろうし、そうした視点から今日さまざまな議論が提起されているはずである。価値と生産価格というかなり馴染みある問題もその埒外にはないと考えることも必要であろう。

そのさい、こうした印象から免れないということも外的外れではないのではと思われるのである。つまり、マルクスにとって最も得意な理論は、「労働力の商品化」を要点とする体系構造なのであろう。したがって、その構造の理論的解析に、つまり得意な分野に議論が集中することは避けられなかったが、しかし同時に、あまり得意ではなかつたそれほど重要度が高くないと判断された領域には議論は向けられ難かった。歴史はやはりそれ相応の結果を出すといえるかもしれないが、軽視されたということであれば、そのために生ずべき結果を出すし、比較的注目度の低かった事柄のちに最重要度を担うということになるのが歴史の常道だともいえるのかもしれない。

もちろん、今日の研究動向からすれば、直接こうした研究史的欠陥に起因するかどうかはともかくとして、「組織と制度」をめぐる諸議論がそれを克服しようとするに関係しているといえよう。学説史的に言えば、制度学派・新制度学派への着目がそれである。また、マルクスによる「流費用」に対応させた D. H. コースによる「取引費用」をふまえた「企業組織」論も当然そうした試みであろう。

それらの議論は、十分注目に値するとしても、全体として見ると「原理」としてどのような展開になるのか、あるいはまた、それに対する「歴史」がどのように位置づけられるのかはいまだそれほど明らかではないように見受けられる<sup>(1)</sup>。あるいは、それらが、価値・価格論にどれほど必然的に関係するかという点についても依然として今後の考察が必要とされるといえるのであろう。

- (1) 「……コミュニケーション関係論においては、人は自己中心的・利己的であっても、他者に対して己の関心を伝え他者の関心に注意を向けざるをえないという存在であるという意味で、利己的かつ共感的な存在であると想定することによって、他者との間に共同主観性（相互主観性）を構成し、『かたち』（ことば、ふるまいなどの形態・形式）を形成し、それを介してコミュニケーション関係を創出すると考えている……。この『かたち』は当事者レベルで成立する意識対象であるが、それは現実には、行為意味、役割、ルール、制度などの現れ方をするものとみている。……筆者は、組織論のもっとも基本的な概念をこのようなものとしてとらえていきたい」（杉浦克己「労働組織のコミュニケーション関係論的研究」、所収、河村哲二編著『制度と組織の経済学』、日本評論社、1996年、150ページ）。おそらく、A. スミスは、この関係論を先駆的に表明していたとみてよさそうである。しかし、そうであるということになると、同時に、この関係論の経済学原理としての展開がどのように与えられてくるか、という点で、「原理」はその原点に立ち戻って行かざるをえないということを指示しているようでもある。つまり、スミスに近ければそれだけ、経済学「原理」の発展の経緯について再考する必要が生じることになりそうである。